

『古漢語通論』 第一章翻訳

田村 祐之（姫路獨協大学教授）

戸内 俊介（二松学舎大学教授）

田村 加代子（名古屋大学准教授）

許 永蘭（瀋陽工業大学副教授）

第一章

序説

1. 古代中国語とは何か

古代中国語は現代中国語の前身となる言語である。つまり、現代中国語は古代中国語を基礎にして発展したものである。現代中国語が古代中国語に基づく以上、現代中国語と古代中国語との間には多くのつながりがあるはずである。同時に、多くの違いもあるはずである。この場合、どの時代の中国語が古代中国語であって、どの時代の中国語が現代中国語であるかは明確な線引きが難しい。

現代中国語の萌芽は13世紀の元代まで遡ることができる。しかし、その形成は五四運動を起点とすべきである。したがって、大雑把に言えば、元明時代から五四時代までの中国語は近代中国語とみなすことができるが、当時は文語文がまだ書き言葉の面で主要な位置を占めており、そのような文語文の作品については、古代中国語の研究範囲に含めることができる。

五四運動以前の中国語はどのような状況であったであろうか。言語は進化するものであり、長い時間の中で絶えず変化しつつあるということを知っておかなければならない。このような変化を記述するのは中国語史の任務であって、ここで多くの紙幅を割くことはできない。いまいえることは、以下の2点である。

第一に、春秋時代末期から、戦国時代、前漢時代にかけて、中国語の書き言葉はすでに非常に成熟した段階に達しており、方言の有用な成分を吸収し、またそれと融合することで、豊富な語彙と相当に厳密な文法を持つ、共通性のある書き言葉となった。これが一般的に言われている「文語」というものである。その頃から清朝までの「文語文」（または、「古文」）は、基本的に文語で書かれるようになった。

一般的に「古文」というと、散文を指すことが多い。散文に対して「駢文」という文体がある。「駢文」は、そのほとんどが対句によって構成されている。古文家と駢文家はしばし

ば互いに批判しあうことがあるが、古文（散文）と駢文両者は単なる文章の形式の相違であり、文語文の下位分野にすぎない。

文語文は上流社会において用いられ、長い間、支配階層のために使われた。社会の発展の過程の中で、文語文は、中国の文化を記録し、普及させ、蓄積する役割を担っていた。名のある政治家、思想家、文学者はみなかつてこぞって文語を使用したため、この文体によって多くの文化遺産が残された。

第二に、文語は口語を基礎として加工されたものであるので、一度形成されると、生きた口語から大きくかけ離れてしまう傾向がある。ただ、だからといって文語が口語と完全に無関係であるといっているわけではない。たとえば、『孟子』には次のような言葉がある。

齊人有言曰、雖有智慧、不如乘勢、雖有鎡基¹、不如待時。（『孟子』「公孫丑上」）

〔齊のことわざに「知恵があっても、時勢に乗じることこそが肝要であり、良い農具があっても、時宜を得ることこそが肝要である」とある。〕

ここに言う「鎡基」は齊人の口語である。また、司馬遷の『史記』も多くの口語を取り入れている。たとえば、

夥頤、涉之爲王沈沈者²。（『史記』陳涉世家）

〔何と贅沢な暮らしぶりであろうか。陳涉は王になって幅を利かせている。〕

臣口不能言，然臣期期知其不可³。（『史記』張丞相列伝）

〔わたくしは口達者ではありませんが、し、し、してはならぬことはよく知っております。〕

『晋書』、『南史』、『北史』など後世の文語文も、やはり六朝の口語を多かれ少なかれ取り入れることを避けられなかった。また、

非三代兩漢之書不敢觀。（韓愈「答李翊書」）

〔三代兩漢（夏、殷、周、前漢、後漢）の書でなければ読む気になれなかった。〕

と豪語する韓愈の古文さえも、当時の口語を完全には排除できなかった⁴。しかし、文語は

¹ 鎡基：田畑を耕すのに使う農具。鋤や鍬の一種。

² 司馬貞の『史記索隱』では、服虔を引いて、「楚人は多いことを『夥』と言う。また、『頤』は、語調を強める助字である。涉が王となり、宮殿の帷や物が多く、その偉くなった様に驚くことを言う。故に『夥頤』と称する」とする。裴駰の『史記集解』では、応劭を引いて「『沈沈』とは、宮室の広く奥まっている様である」と言う。

³ 期期：吃音を表す擬声語である。

⁴ 杜仲陵〈略談韓愈的书面语言与当时的口语的关系〉〔韓愈の書き言葉と当時の話し言葉との関係に關す

あくまで支配階級のためのものであった。封建貴族階層は、自分たちが「卑俗」と考える庶民の言葉を常に否定していたので、古代の民間の言語が文語にすべて反映されることはあり得なかったし、庶民の言葉が過去の言語学者に注目されることもなかった。そのため、古典とはいえ庶民の言葉(すなわち口語)で書かれた作品を読むときは、文語文よりも難解に感じることもある。これはたとえば唐や五代の変文、宋人の話本、金・元の戯曲などである。

古代の口語、すなわち白話は民間で発展し続け、現代中国語の発展の主な源となった。しかし、白話はこれまであまり重視されず、その収集、整理、研究が不足しているため、今日早急にこのような状況を改善する必要がある。

古代中国語は古代の文語と白話の総称であり、研究の面では、白話に対する研究の方がより求められているが、古代中国語を学ぶという点では、やはり古代の文語の方がより重要な位置を占めている。文語は比較的規範性が強く、そのため、文語を知ってから白話を研究する方が比較的容易である。古代において、文語で書かれたものの範囲は非常に広く、政治的、哲学的論著、歴史的文獻、文学の中の詩、散文、詞から、戯曲、小説にいたるまで文語的な要素が一定の役割を果たしている。したがって、古代中国語を学ぶときには、白話に適宜配慮しつつ、文語に重点が置かれるべきである。

2. 古代中国語と現代中国語

現代中国語は古代中国語を継承し、古代中国語から変化したものである。

発音は言語の中で最も変化しやすいものである。たとえば、「天明」の2文字は、今日では *tīan míng* と発音されるが、古代のおおよその発音は *[t'ien mian]* であり、かなり異なっている。しかし、この2つの発音には連続性があり、頭子音の *t* と *m* は変わっていない。「文」、「問」、「無」は、今日の読み方では *w(u)* で始まるが、中古以前は *m*、中古以降は *v* で始まる。この変化は先ほどの例より複雑で、*m*→*v*→*u* となる^[訳注1]。さらには発音がもっと大きく変化したものもある。たとえば、「愉」(*yú*)の字を古音では「偷」(*tōu*)と読み、「委蛇」の「蛇」(*yí*)を古音では「陀」(*tuó*)と読むなどである^[訳注2]。しかし、注意深く考察すると、これらの変化にはその過程を探る手がかりがある。それは、1音1音が個別に不規則に変化するのではなく、複数の音がまとまって一定の経路をたどって変化することである。こ

る一考察] (《语言研究》第4号、1959年)を参照のこと。

[訳注1] この音変化は軽唇音化と非鼻音化という現象に関わるものである。唐代以前、唇音声母はもともと幫 *p*-、滂 *pʰ*-、並 *b*-、明 *m*-のみであったが(これを重唇音と呼ぶ)、唐代以降(8世紀以降)、*-i*-介音且つ中舌または奥舌主母音という条件のもと、新たに非 *f*-、敷 *fʰ*-、奉 *v*-、微 *ɱ*-の軽唇音声母が生じた(平山久雄「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」、『北海道大学文学部紀要』15-2、1967年；橋本貴子「対音資料から見た唐代の軽唇音化について：附論日母の脱鼻音化」、『神戸外大論叢』73-3、2021年)。この変化を軽唇音化と呼ぶ。微 *ɱ*-はさらに非鼻音化により *v*-に変化した。本文で言及されている *m*→*v* の変化はまさにこのような音変化現象を経て成立したものである。

[訳注2] 上古音研究では原則的に、たとえ中古以降字音が異なっている文字同士であっても、声符が同じであれば、かつては字音が接近していたと考える。したがって、ここは上古において、「愉」と「偷」の字音が近く、また「蛇」と「陀」の字音が近かったということを述べている。

これらの変化の規則と過程は、中国語音韻学と中国語史の中で研究されるべきである。

語彙は言語の材料であり、客観的な世界に対する人間の認識の印である。人間の認識が深まり、広がるにつれて、語彙は絶えず発展し、多様性を増す。語彙の発展と多様性は非常に複雑である。一般的に言えば、次のような点があげられる。

第一に、基本語彙は比較的寿命が長く、基本語彙の中核部分である語根語^[訳注3]は、語彙発展のための最も安定した基礎となる。たとえば、「天」、「地」、「人」、「山」、「水」、「魚」、「鳥」、「方」、「圓」、「長」、「短」、「上」、「下」、「前」、「後」、「東」、「南」、「西」、「北」、「生」、「死」、「心」、「肝」、「脾」、「胃」などのようなものがある。時代が下り語彙がさらに発展しても、語根語は最も古い時の形態のまま残る。

第二に、古代中国語は、単音節語、つまり単純語が多く、現代中国語は、2音節語、つまり合成語が多い。たとえば、古代の「民」が現代では“人民”〔人民〕となり、古代の「産」が現代では“财产”〔財産〕となり、古代の「雨」が現代では“下雨”〔雨が降る〕となるように、いずれも2音節化している。またたとえば、

爲人謀而不忠乎。(『論語』学而)

〔人のために何かをしたとき誠心誠意行っただろうか。〕

の例にみえるように、古代で「忠」と呼ばれたものが、現代では2音節の“忠实”〔忠実〕となる。したがって、これらの語形成上の違いは、中国語の語彙が社会の発展の需要に応じてますます精緻化してきたことを示している。

第三に、古代中国語では1語が複数の意味を兼ねる現象が比較的一般的であったが、現代中国語では表現の精密さが要求されることと、このような精密さを表す条件が整ってきたことから、語義の分業も固定化される傾向がある。たとえば、古代の「産」字には現代の“生産”〔生産〕と“财产”〔財産〕という2つの意味が含まれていたが、現代では2種類の合成語が2つの意味を分担している——ここではごく簡単な例を挙げたにすぎず、「産」字が、古代においてこの2つの意味しか表さなかったわけではないが、この例から、古代中国語の一字多義がどのように現代中国語では表されているか、その一端が理解できるだろう。

第四に、古代と現代で(文字は同じだが)意味が異なる語があり、また、古代では使われていたが現代では使われていない語や、現代でほかの語に置き換えられたものもある。前者の場合、たとえば「處分」という語は、古代では今日の「対処する、手配する」に似た意味を表していたが、現代では「懲らしめる」という意味を表している。後者の場合、古代では「乗」が乗り物の量詞(助数詞)として使われていたが、現代では「乗」ではなく“輛”が使われる。当然、古代にはなく現代になって追加された言葉もある。

[訳注3] 「語根語」の「語根」は、屈折語という語根(root)という概念を中国語に援用し、語彙が連語化(2音節化)するときに核となり変化しない部分(1音節でありかつ1字)である。すなわち語彙が増殖するときに核となる語を「語根語」と言っている。

第五に、同類の事物を表す語があり、古代では1つ1つ異なる文字が当てられていたが、後世では類の名前を表す語の前に修飾語を加えて合成語を形成することで分析的に表現される。たとえば、古代では、雄牛は「牡」、雌牛は「牝」と呼ばれていたが、後世では、「牛」を中心語(被修飾語)とし、それぞれ連体修飾語を加えて“公牛”〔雄牛〕、“母牛”

〔雌牛〕となった。このようにして、現代中国語の語彙から事物の名前に関する古い語彙が多く淘汰された。これは人間の事物に対するカテゴリー化、一般化の能力が進化した結果である。

語の意味においても、語の語形成においても、中国語の語彙は絶えず変化している。しかし、語彙が発展する基礎となる語根語の部分は、安定しており、恣意的に変化することはない。

文法とは、語の変化の規則と語を並べて文を構成する規則の集合であり、言語の歴史の中で最も安定している。中国語の文法の基本的な構造や文を構成する各成分は、古代と現代でほとんど変わらない。ただ、品詞の活用や一部の文の成分の省略、若干の語順に違いがある。たとえば、

爾後小娥便爲男子服，傭保於江湖間。(李公佐『謝小娥伝』)

〔その後、小娥は男子の服を着て、傭保(人夫)として巷間で雇われた。〕

という文を見てみよう。この文における「傭保」という語は、もともと名詞であるが、ここでは「傭保として働く」という意味で、動詞として用いられている。また、同じ作品の「傭保雑處，不知女人」という文を見てみよう。この文は、

〈小娥〉〈與〉傭保雑處，〈而〉〈人〉不知〈其〉〈爲〉女人。

〔〈小娥は〉傭保〈と〉雑処し〈たが、しかし〉〈人は〉〈彼女が〉女〈であること〉を知らなかった。〕

の省略である。このうち「小娥」、「而」、「人」の省略は、現代中国語でも同様の省略が認められる。「與」、「其」、「爲」の省略は、古代中国語特有のものである。

語順の変動については、後述する。

以上のことから、現代中国語と古代中国語はまったく異なる2種類の言語ではなく、現代中国語は古代中国語を継承しつつ発展してきたものであることがわかる。そのため、たとえ、古代中国語と現代中国語との間に音声、語彙、文法において多少の変化があったとしても、現代中国語によって古代中国語を推定し理解することができるのである。

3. 古代中国語を学ぶ目的と目標

私たちが古代中国語を学ぶのは、古代語を話したり、古代人になったりするためではなく、社会主義の文化を構築することに役立てるためである。祖国の文化遺産を引き継ぎ、吸収することなしに、社会主義の文化を構築することはできない。古代中国語が祖国の文化的成果を記録し、普及させ、蓄積する役割を担ってきた以上、古代中国語に対する理解を通して、古代の文化遺産を批判的に吸収し、特に、古典文学の学習に役立てることが古代中国語学習の目的の1つである。具体的な目標は、一般的な文語文を読むことができ、古典文学作品の言葉使いや修辞法などについて、一通り理解することである。これが古代中国語という科目の主な目的と目標である。

しかしながら、古代中国語は、言語科学の一部門であるから、文語文がただ読めるだけでは古代中国語を十分に理解したとはいえない。文語文が普通に読めても、なぜそのように読めるのかという理由について知らない人もいる。古代中国語の学習には、古代中国語の基本的な知識を科学的に理解することが求められる。つまり、文章を読んで意味が分かるだけでなく、古代中国語の基本的な規則をある程度身につける必要がある。これによって、中国語史を勉強するための基礎を固めることができる。これこそ、言語を専攻とする学生にとってより必要とされることである。

古代中国語を学ぶことで、現代中国語がどのように形成されてきたのか、言語の発展にどのような現象があるのかについて、より明確に理解することができる。中国の言語政策は言語変化の具体的な状況や変化の規則性を基礎として策定されたものである。したがって、古代中国語を学ぶもう1つの目的と目標は、現代中国語のよりよい理解に役立て、国家の言語政策を理解し、その実行に努めることである。そのためには、古代中国語を現代中国語と適切に関連付けなければならない。それは主に中国語史の担うべき分野ではあるが、この古代中国語の講義でも当然ある程度は触れることになる。

4. 古代中国語を学ぶ方法

私たちは古代中国語に触れる機会が少ないため、当然ながら、古代中国語を理解することは現代中国語を身につけるよりも難しい。しかし、古代中国語と現代中国語はまったく異なる2つの言語ではないため、現代中国語を身につければ、古代中国語を身につけることは当然可能である。どうすれば古代中国語を身につけることができるであろうか。ここでは、3つの要点をあげておく。

第一に、学習の目的を明確にし、簡明で目的に合った学習方法を選ぶ。私たちの目的は古代の文献や文学作品を理解することであり、古代中国語の規則を学ぶことであって、知識の豊富さをひけらかすことでも、世を驚かすことでもない。したがって、古典の理解に有益ではない、煩瑣な方法は排除すべきである。たとえば、文章や古書を読むときには註釈を読む必要があるが、先人の註釈は取捨選択して読む必要がある。昔の人がよく読んでいた『論語』や『孟子』(私たちもなおこの二冊の本を読まなければならない)を例にとると、朱熹による

注釈書『論語集注』と『孟子集注』のほか、清朝の考証学者、劉宝楠の『論語正義』と焦循の『孟子正義』がある。もちろん、劉氏、焦氏の注釈にも妥当な部分はあるが、煩雑で無駄と思われる部分も多く、朱熹の注釈ほど簡潔ではない。劉氏は『論語』第一句の注において、「曰」の1字だけに対して百文字以上を費やしている。私たちには、劉氏の言葉の浪費につきあう時間はない。古代中国語を学ぶ上で、先人に学ぶことは必要であるが、盲従してはならず、取捨選択することなく無批判に全てを受け入れてはならない。何を学ぼうと、学ぶ過程において、その知識が役に立つかどうか、学習目的に合っているかどうかを問わなければならない。

第二に、古代中国語を学ぶには、理論と現実を結びつけ、具体的な言語資料と言語規則のいずれも重視すべきである。規則に基づき言語資料を観察、分析し、また言語資料の中から規則を発見し、言語資料で規則を検証、修正していくべきである。両者のうち、言語資料を熟知するのがさらに基礎となる。具体的な古代中国語の資料から切り離して古代中国語を語るならば、たとえ、理論の説明がいくら優れていても、文字が読めない、文を区切ることができない、前後の文をつなげることができないのでは、それらの理論は何の役にも立たないということになる。逆に、一文字一文字認識したり、一語一語の意味を寄せ集めたり、一文一文を文脈を無視して捉えようとしたりするだけでは、言語が表さんとする主旨を理解することはできない。先人がまとめあげた音声、語義、文法の規則を駆使して目の前の言語資料を分析してこそ、文章全体をつなげることができ、より少ない労力でより大きな成果をあげることができる。

第三に、典故や常用語の意味など、個別の知識に関わるものには、一貫した規則性があるわけではないので、何度も見て繰り返し覚えるしか身につける方法がない。一方、体系だったものや一括りにできるものには、規則性があるとはいっても、やはり、1つ1ついえるようにならなければいけないので、熟読してしっかり覚えなければならない。現代中国語でいえば、漢字の発音を表すピンインがまさにそうである。一方、古代中国語でいえば、これから学ぶ「三十六字母」もこれにあたる。これらは、覚えることを避けて通ることはできない。

古代中国語を学ぶ方法は、無駄なく、煩雑さを避けるべきである。そして、手間暇かけることを苦にせず、言語の規則と言語資料を結びつけ、地道に学習を重ねて行けば、必ず古代中国語を身につけることができる。